

大妻多摩中学校

二〇一七（平成29）年度

入学試験問題（第一回）

【国語】

時間 50分

2月1日（水）

【注意事項】

- 1 問題は15ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、1～13は、形式段落の番号を表しています。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と教えること。

1 わたしは英会話が苦手である。① 英語を母国語とする国に行ったことがない。ドイツには二年間住んだことがあるし、その間にもヨーロッパの諸国を旅した。仕事でアジアの国々も訪れた。② 英語を話す国だけは、たまたまなのか、無意識に回避しているところがあるのかさだかでないが、足を踏み入れたことがない。米国も英国も(その後二〇〇八年秋、わたしは仕事でとうとう米国へ行ってしまった——追記)。

2 国際交流は英語をおいて考えられない。ヨーロッパ人どうしも、アジア人どうしも、言葉を交わすときは話したいは英語だ。

3 ③、言語のグローバル化とはとりもなおさず英語の世界標準化のことなのだろうか。「グローバル化しているのはイングリッシュではなく、ブローケン・イングリッシュだ」と言ったひとがいる。④ 言いて妙である。

4 英語はたしかに世界を注1 席卷している。けれども世界に普及してゆくと同時に、英語としては「墮落」してゆく。文法も発音もときには統辞法も崩れてゆく。これはちやうど、英語より一足先に⑤ した洋服が、非西洋圏に伝播してゆくにつれて、服としての様式を崩していったのとよく似ている。西洋人は、極東の国で政治家が半袖の背広を着るなどとは想像もしなかつただろう。ただし、これはけつして良し悪しの問題ではない。

5 大学ではこれまで哲学の教鞭をとってきたが、哲学専攻の学生には英・仏・独三か国語の注2 履修を義務づけている。それらの源流にあるラテン語やギリシャ語の履修も推奨している。専門課程に進学してきた学生にその外国語の履修条件を告げると、学生の多くが「どうして原語で読まないといけないんですか。せつかく多くの翻訳本があるのに」と、⑥ ちよつと不満顔をする。

6 「動詞や形容詞の活用が複雑で面倒臭くても、知らない言語を声に出して、からだに通すこと、それが大事なのです。それらを学ぶ意味はあとになって分かります」。そうわたしは言い切ることにしている。学生は納得しないまま、しぶしぶ学習をはじめ。

⑦ いうまでもなく思考は言葉で編まれるが、そのとき言葉は思考形成の手段なのではなく、それじたいがすでにひとつの思考である。言葉が違えば、世界を意味で区分けする仕方、つまりは世界の分節が異なるからだ。

⑧ たとえば英語では、相手が先生であっても幼児であっても、相手のことを「ユー」もしくはファーストネームで呼ぶ。じぶんのことは、相手によって「わたし」「ぼく」「おれ」などと言い換えず、つねに「アイ」と言う。これを言葉の問題にすぎないと言うことはできない。

⑨ また、動詞の活用は、主語の区別にしたがい「アイ・アム」「ユー・アー」「ヒー・イズ/シー・イズ」というふうに変化する。「これは机である」という客観的事実について言うときは、いつも、だれと話すときでも「デイス・イズ・ア・テーブル」である。ところが、日本語では、話す相手との関係（とくにその勾配）によって「ある」が変化する。だれと話すかによって、「机です」「机だ」「机でいます」と変化する。

⑩ 要するに、言葉が違くと、世界とのまみえ方、他者へのかかわり方まで異なってくるということだ。だから、じぶんがずっとなってきた自然との関係、他者との関係をもっと別なものへと組み換え、変容させようというときには、外国語の言葉つかいのなかへじぶんをいちど置いてみるのが大きな意味をもつ。ものごととの別な関係のあり方へとじぶんを開いてゆくためには、異なる言語を学ぶということが大きな助けになるのだ。じっさい、大学の授業で、「先生」「くん」の呼び方をやめて、だれがだれに話すときにも「さん」づけにしたなら（もちろんわたしも男子学生を「さん」づけで呼ぶ）、会話の空気のみならず、話の中身まで変わった。

⑪ じぶんのそれとは異質な思考法、知覚法を、じぶんに理解可能な地平へとむりやり押し込むのではなく、それをそれじたいのほうから学ぶということ、そのことで逆にじぶんの理解の地平を広げてゆくということ。これが、異なる言語を身に通すことの意味である。

⑫ これは朗読の心地よさに似ているかもしれない。朗読には、つい内へと塞ぎがちなじぶんの身体を大きな声とともに開いてみるという快さもあるが、もうひとつ、別の考え方、感じ方をじぶんのうちに住まわせることで、じぶんの凝り固まった想いをほぐし、

編みなおし、あたかも別人であるかのように語りだすという、ちよつと妖しい悦びがある。

13 英語を身につけると大いに役に立つが、英語しか学ばないのは、別のかたちで世界を狭くする。

(鷲田清一『噛みきれない想い』『英語はグローバル?』〔角川学芸出版〕より)

注1 席卷……ものすごい勢いで勢力を広げること。

注2 履修……一定の学科・課程などを修得すること。

問1 ① く ③ に入れるのに最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号

を二度以上使用しないこと。

- ア あるいは イ けれども ウ 例えば エ では オ そもそも

問2 ——線部④「言いて妙」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 思い切りよく言い放つさま イ 微妙に言い換えているさま
ウ 巧みに言い表しているさま エ 不思議と説得力のあるさま

問3 ⑤ にあてはまる言葉を、本文中から六字で抜き出して答えなさい。

問4 ——線部⑥「ちよつと不満顔をする」とありますが、学生たちがそのような顔をするのはなぜですか。その理由を、本文中の

語句を用いて四十字以内で答えなさい。

問5

——線部⑦「これを言葉の問題にすぎないと言うことはできない」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア** 英語において相手や自分を指す言葉が、相手との関係性によって変わることがないということは、単に言語による表現の違いというだけではなく、そこでは客観的事実さえわかればよいという考え方の違いまでもが表れているということであるから。
- イ** 日本語において相手や自分を指す言葉が、相手との関係性によって変わることがないということは、単に言語による表現の違いというだけではなく、そこでは客観的事実さえわかればよいという考え方の違いまでもが表れているということであるから。
- ウ** 英語において相手や自分を指す言葉が、相手との関係性によって変わることがないということは、単に言語による表現の違いというだけではなく、そこに物事との接し方の違いや、他者への関わり方の違いまでもが表れているということであるから。
- エ** 日本語において相手や自分を指す言葉が、相手との関係性によって変わることがないということは、単に言語による表現の違いというだけではなく、そこに物事との接し方の違いや、他者への関わり方の違いまでもが表れているということであるから。

問6

——線部⑧「日本語では、話す相手との関係（とくにその勾配）によって『ある』が変化する」とありますが、この考え方を踏まえて、もしあなたが次の内容を、担任の先生に話すとしたら、どのように言えばよいですか。三箇所、書き直して、一文で答えなさい。

「今日、校長室に行ったら、校長先生が言ったとおり、机にお花があった。」

問7

——線部⑨「それ」が指し示す内容を、本文中から抜き出して答えなさい。

問8 —線部⑩「英語しか学ばないのは、別のかたちで世界を狭くする」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も

適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 英語を学べば西洋圏における国際交流については問題ないが、それだけだと非西洋圏のブローケン・イングリッシュを理解することができず、より幅広い国際交流ができないから。

イ 英語を学べば西洋圏における国際交流については問題ないが、それだけだと非西洋圏との国際交流を深めるきっかけがつかめず、自分が関わっていけない世界が限られてしまうから。

ウ 英語を学べば英語圏における物事の思考法や知覚法は身につくが、それだけだと別の言語圏に対する興味を深めることができず、自分が行きたいと思える国が限られてしまうから。

エ 英語を学べば英語圏における物事の思考法や知覚法は身につくが、それだけだと別の言語圏に対する理解を深めることができず、自分の理解の幅を広げていくことができないから。

問9 本文における各段落の役割を説明したものとして**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア [2]段落は、[1]段落で述べた筆者の経験に基づき、本文全体の結論を示している。

イ [4]段落は、[3]段落の内容を受けて、その内容を具体的に説明している。

ウ [8]・[9]段落は、[7]段落の内容を受けて、日本語と英語とを比較しながら、言葉の違いが及ぼす影響について述べている。

エ [12]段落は、[11]段落で述べた内容と、同じ観点から別の例を挙げて、自らの主張を補強している。

問10 本文の内容に**合致しないもの**を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア** 異なる言語を学ぶ意味は、自分とは異なる考え方や感じ方を学び、自分の理解の幅を広げていくことである。
- イ** 大学の授業で、誰が誰に話すときにも「さん」づけにしたところ、会話の空気だけでなく、話の中身まで変わった。
- ウ** 朗読には、別の考え方や感じ方を自分の中に取り入れることで、まるで別人のように語り出すという妖しい悦びがある。
- エ** 国際交流には英語は欠かせないものであり、言語のグローバル化を展開する上で英語だけがその役割を担うことができる。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしております。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と教えること。

「書記に塚原マチさんを推薦すいせんします」

一年五組の教室で、威勢よく手を挙げた光田琴穂こうだことほの口からその声が出た瞬間、^①背筋に冷たいものがすべりおちた気がした。あわてて顔を見つめるが、琴穂はマチの方を見ないで、まっすぐ黒板を見つめて続ける。

「理由は、昔から字がうまいからです。小学校が一緒なんだけど、その頃から何回か書記やってもんね？」

尋ねるときだけ、マチの方を見る。マチはどう答えていいかわからず、顎あごだけゆっくり引いて頷うなずいてしまった。確かにそうだった。だけど、そうやって引き受けた書記は自分から立候補したわけではなく、そのときだって誰かから推薦されたからやっただけだった。

「じゃあ、塚原さん、どうですか」

すでに委員長に決まり、みんなの前に立った守口みなみが言う。小学校の違う彼女は、まだ知り合って間もないクラスメートだったが、そのみなみから「塚原さん」と急に名前を呼ばれると、おなかの奥がきゅつと^②したように痛くなる。

背が高く、首筋までのショートカットの髪は、いかにも昔から運動をやっついそうな雰囲気だ。そのきはきした物言いや、何より入学して二週間足らずの新学期の教室で、堂々と手を挙げて委員長に立候補するなんて、マチには想像もできないくらい活発さだった。

「私……」

^③気後れしながらも立ち上がると、クラスの全員が自分を見るのを感じた。

^④

がすくんだようになる。

(断らなきや)

小学校の頃から、いつもそうだった。自分の意見がはっきり主張できないことを、両親や先生から注意されていたし、誰かから頼

まれごとをすると、マチはそれをなかなか断ることができない。中学に入ったら、そんな自分の性格を直したいと思っていた。

「どう？ 塚原さん。書記の仕事、嫌？」

担任の先生までが言う。

仕事が嫌なのではなくて、こうやって流されてしまうのが嫌なのだと言おうとするが、大勢の人を前にしたら、どう言えばいいのかわからなくなった。かわりに口から「やりませう」^⑤というか細い声が出た。

前にいるみなみがつこりと笑った。

「ありがとう。じゃあ、書記は塚原さん。早速^{さつそく}だけど、前に出て黒板に書くのを替わってもらっていいですか」

「はい」

返事をして前に行く。人から注目されるのは苦手だった。前に歩き出すとき、膝^{ひざ}に嫌な力が入ってしまう。

⑥ 黒板に書かれた名前を見る。

副委員長は、さつき自分を推薦した光田琴穂と、長沢恒河^{ながさわこうが}に決まっていた。恒河もみなみと同じ小学校出身で、昔から二人は仲がいいのか、さつきから息の合った調子でサバサバと議事を進めていく。彼もまた明るくはつきりと物を言えるタイプなのだろう。

「今から他の委員決めるけど、みんな、しっかり立候補しろよー」

ふざけ調子に恒河が言い、それをみなみが「恒河」と名前を呼んで軽くたしなめる。

胸の奥がちくりと痛んだ。なにげないはずの恒河の言葉が、立候補ではなく推薦されるまで黙って座っていた自分への注意のよう
に感じられた。

黒板の前でチョークを握り締めながら、マチは、そういえばこの間の部活を決めるときも こんなふうだった^⑦ことを思い出していた。

二週間前、入学式が終わったすぐ後で、「マチ、部活どうするの？」と琴穂から話しかけられた。

琴穂もまた、小学校から学級委員などをつとめ、友達が多いタイプだった。昔から仲がいいけど、眩^{まが}しいほどにはつきりと相手に

言葉をぶつける琴穂と自分は、まるで性格が違う。

「私、陸上部に入ろうかと思って」

「え。運動部なの？ マチには似合わない気がするけど」

勇気を出して言ってみたのだが、⑧ を呑みこむ。⑨、小学校では運動部に入ってこなかった。黙ってしまったマチに、

琴穂がさらに言う。

「あと、噂だけど、陸上部は練習厳しいし、先輩たちもみんな怖いらしいよ。やめといた方がいいかも」

「そうなんだ……」

琴穂の言葉に、膨らんでいた期待が急にしぼんでいくのを感じた。

「琴穂はどうするの、部活」

「私？ バスケット部。小学校の頃からミニバス好きだったし」

琴穂とのやりとり以降、今では陸上部に入りたいという気持ちはだいぶなくなっている。仮入部のための見学にも一度も行っていない。運動部に入る気がなくなっても、何かの部活には入らなければならない。今のところ、校庭でペットボトルロケットを打ち上げる活動があると聞き、楽しそうだと科学部だけを見学に行った。このまま、自分は科学部に入るのだろうか。

委員長になったみなみが陸上部に入るつもりらしいことを、マチはもう聞いて知っていた。本当に、あの子はなんて自分とは違うのだろうか。憧れに似たため息が落ちて、それからやはり落ち込んでしまう。

一日の授業が終わり、運動部に行くクラスメートたちが着替えのジャージを手に教室を出て行くのを眺めていると、ふいに背後から「塚原」と呼ばれた。振り返ると、隣の席の海野奏人だった。

クラス一背が高く、男子の大半が坊主頭かスポーツ刈りのうちのクラスでは珍しく、茶色がかった髪をさらつと流している。普段の口数は少ないが、授業で誰もわからない問題に一人だけ正解を答えるような場面をもう何度か見ている。隣の席だけど、話すのは、ほとんど初めてだ。

「今日、科学部行く？」

「あ」

聞かれて思い出した。何回か行った科学部の見学に、奏人もいつも来ていた。彼はきつと入部するつもりなのだろう。奏人が微笑む。

「もし行くなら、今日は校庭で活動するみたいだよ」

「うん。ありがとう」

「おい、奏人。今日、自転車置き場で待ち合わせしようぜ」

奏人の横で、部活に向かう途中の恒河が言う。彼はサッカー部で、持っているシャーペンや下敷きも、マチの知らない外国のサッカー選手の写真入りのものが多い。同じクラスでしばらく見ていて驚いたのだが、一見正反対に見えるこの二人は、小学校からの親友で仲がいいらしい。

「わかったよ。部活が終わったらそこで待ってる」

奏人が答える声を聞きながら、せっかく誘われたのだから、校庭で科学部を見学しようかな、とぼんやり考える。はつきり意見を言えない自分を変えたいという目標を叶えるには、まだまだほど遠いことを実感する。

校庭に向かう前に、マチは図書室に寄ることにした。小学校の頃から本が好きで、六年間かけて、前の図書室の本は大半を読んだように思う。中学に入ったら、きつともっと大きな図書室に通えるのだろうと^⑩心待ちにしていた。

中に入り、本の匂いを嗅ぐと気持ちが落ち着いていた。^⑪、貸し出しカウンターの向こうに、当番らしい図書委員の先輩が座って本を読んでいるのを見て、昼間の学級会で感じたのと同じ、おなががきゅつとする痛みがまた戻ってきた。

マチは本当は図書委員になりたかった。

だけど、クラスの中でできる役職は一人につき一つだけだ。書記を引き受けてしまったせいで、委員会に入れなくなった。自分が

はつきり主張しなかったせいで。

考えても仕方ない、と首を軽く振り動かし、借りる本を選ぶ。

⑫

仮入部であっても、部活の時間に遅れるわけにはいかなか

った。

小説の棚を眺め、一冊の本に

⑬

を留める。リザ・テツナーの『黒い兄弟』。過酷な境遇の中、仲間と助け合って困難を乗り越え

ていく煙突掃除の少年たちの話だ。小学校の図書室にもあったけど、また読み返せるのだと嬉しく思いながら、本を手取る。

たとえ同じ作品であっても、子供向けに書かれたものと大人向けのものがあることをマチは知っていた。文章の量、文字の大きさ、漢字の多さ。これまで自分が読んできた本とは、違うだろうか。

新しい、中学校の本。ここにあるすべてをこれから三年間かけて読んでいいのだと思うと、わくわくする。

(辻村深月『サクラ咲く』〔光文社文庫〕より)

問1 — 線部①「背筋に冷たいものがすべりおちた気がした」のは、予想外の書記に推薦されて困ったことによりますが、その困つ

た理由として考えられる二十字以内の一文を、本文中から抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

問2

②

に入れるのに最も適切な言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 緊張

イ 興奮

ウ 軽蔑

エ 我慢

問3 ——線部③「気後れ」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気分がよくなくてフラフラと体が動いてしまうこと
- イ 緊張し過ぎてどうしてよいかわからず呆然としてしまうこと
- ウ 周囲の雰囲気になじめずに孤立している気分になってしまうこと
- エ 相手の勢いやその場の雰囲気などに押されて心がひるんでしまうこと

問4 ④・⑬には、身体の一部を表す漢字が入ります。それぞれ、漢字一字で答えなさい。

問5 ——線部⑤「やります」というか細い声が出た」とありますが、そのようになった理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本当はやりたくなかったが、嫌だというと委員長や先生に怒られるのではないかと思ったから。
- イ 本当はやりたくなかったが、今までの消極的な自分の性格が嫌だったので、積極的になろうと思ったから。
- ウ 本当はやりたくなかったが、引き受けることを期待している人もいるし、うまく断ることができそうになかったから。
- エ 本当はやりたかったのだが、立候補をしないでいて、推薦されてよろこんでいることをみんなに知られたくなかったから。

問6 ⑥・⑨・⑪・⑫に入れるのに最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア しかし
- イ 確かに
- ウ それで
- エ たとえ
- オ すでに

問7 — 線部⑦「こんなふうだった」とありますが、どんなふうだったのかを、具体的に百字以内で答えなさい。

問8 □⑧ を呑みこむ」は、驚いたり恐れたりする状況を表現しています。 □⑧ に入る漢字一字を答えなさい。

問9 — 線部⑩「心待ち」とほぼ同じ意味の言葉を、— 線部⑦から— 線部⑩までの本文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問10 本文の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 活発で積極的なクラスメートのみなみや琴穂をうらやましく思い、何とか自己主張ができるようになりたいというマチの心情を中心に物語が進行している。

イ 能力があるのに自己表現がはつきりできないマチのことを心配して書記に推薦し、クラスの中になじめるようにしてくれた親友の琴穂との友情を描いている。

ウ 立候補した学級委員長のみなみと推薦で選ばれた書記のマチの行動を対比させて描き、優柔不断な態度を取ることがどれほど良くないことを強調している。

エ 読書が好きで本を読んでいれば幸せなマチが、クラスの中心として活動しなければならぬ書記になってしまい、自分を推薦した琴穂との関係に悩んでいる様子が描かれている。

三

次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 台風の暴風へのケイカイを呼びかける。
- ② 公園に置く銅像がセイサクされる。
- ③ オリンピックでヒヨウシヨウ台に上る。
- ④ 雨で遠足がエンキになった。
- ⑤ クフウをこらした展示をする。

問2 次の□部分にはそれぞれ共通の部首が入ります。例にならって、その部首の名前をひらがなで答えなさい。

例： 云・ 申・ 本・ 主

答：にんべん

① 干・ 別・ 和・ 害

② 熱・ 点・ 然・ 無

③ 𠂇・ 土・ 右・ 申

④ 良・ 君・ 者・ 牙

⑤ 十・ 失・ 艮・ 令

以下余白

